

文屋（六歌仙容彩）の内

烏帽子きた鷹の羽おとしきよろ

小鳥めがけて一のしに

その人柄も康秀が裳にじゃれる猫の恋

届かぬ乍らねらひきて

行くをやらじとコレ待った

仇憎らしいなんぢやいな

お清所の暗まぎれ

晩にやいのと耳に口

むべ山風の嵐ほど

どつと身にしむ

嬉しさも

秋の草木がしほ

一人寝よとは男づら

鮑の貝の片便り

情ないではあるまいか

寄るをつきのけ

コリヤどつぢや

鼻の障子へたまさかに

ねぶかの香るあだつきは

時候違ひの河豚汁で

一人ばかりか盛かへを

強ひつけられぬ御馳走は

そも おじぎは仕らぬ

これを思へば少将が

九十 九夜

思ひつめ

傘をかたげて丸木橋や

おつとあぶねえすでの事

鼻緒は切れて片足は

ちんが

ちが オゝつめた

その通路も君故に

衣は泥に

あかつきのすこ かへる

憂き思ひ

ならぬ乍らも我恋は

末摘花の名代を

つき付けられて

恥かしい

地下の女子の口ぐせに

田町は昔今戸橋

法印さんのお守りも

寝かして猪牙に柏餅

夢を流して隅田川

男除けならそつちから

あえばいつもものくちぐるま乗せる手ごとはお断り

逃げんとするを恋知らず

引留むるのを振払ひ

イヤ

逢ふ恋

待つ恋 忍ぶ恋

かごはシテこい

もえぎのかや 呼んでこい

ぎつちり詰ったやにぎせる

えくほのいきのうくばかり

これぢやゆかぬと康秀が

富士や浅間の煙はおるか

衛士の焚く火は沢辺の蛸

やくや藻汐で身をこがすさうぢやえ

合縁奇縁は味なもの

片時忘るゝひまもなく

一切からだもやるきになつたわいな

さうかいな

花に嵐の色の邪魔

寄るをこなたへ遣戸口

中殿さしてぞ走り行く。